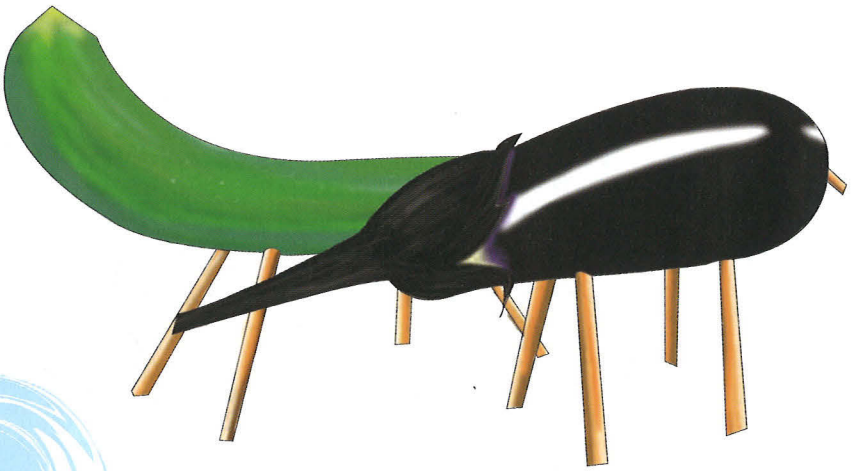
子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2012年7月　NO.168



［もくじ］

2～ 3　地域のデザイン…島村卓実

4～ 5　今日も私は犬猫を処分しています…野村笹乃

6～ 7　はらたいらさんの思い出・七回忌によせて…永吉功

8～ 9　言葉の現場から 34「舞姫」豊太郎の反抗期のなぞ…広井護

10　「聞き書き」の思い出は僕の宝物…佐竹大和

11　鎮守の森は今 県内の神社めぐり体験記（四）…竹内荘市

12～13　高知市文化振興事業団 4 月～6 月の事業から

14～15　風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「お盆の日」元久芽以

公益財団法人 高知市文化振興事業団

地域のデザイン

島村 卓実

プロダクトデザイナーの島村です。佐川町で生まれ、須崎市で育ち、大学は東京で過ごし、自動車会社デザイン部門に在籍したのち、デザイン会社を設立して現在に至ります。

プロダクトデザイナーという仕事は工業製品のカタチを考えていく職業です。皆さんの前にある、冷蔵庫や携帯電話、車や食卓のお皿にいたるまで、量産されている製品はプロダクトデザインというわけです。

いわいるアートと違うのは個人の感性によって一つのカタチをうみだすのではなく、多くの制約のなかで人々に受け入れられながら、数千、数万個以上つくってビジネスとして成立し、なおかつ美しい製品をつくらなければならない事でしょうか。商業美術という言い方をする人もいますね。大量につくるので失敗しないために、市場調査をしながら時代毎の人々の生活の模様を映し出していきます。

エンジニアが考えた図面通りではない、新しいライフスタイルやトレンドの研究が常に問われる分野でもあります。

私の手がけている製品も企業のニーズや人々の消費形態がかわるにつれだんだんと守備範囲も広がってきています。携帯電話のような端末機のような小さなものから、大型プリンターやバス、雑貨等の小物から、建築にいたるまで。一方ではアプリやホームページの開発まで立体、平面、ハードからソフトにいたるあらゆるデザインが要求されています。

それに従って、私たちデザイナーの役割もかわってきました。どちらかというと職人のような立場で要求された条件からこつこつ削ったり、デジタルデータをつくる仕事からクライアントと工場や消費者をつなぐというコミュニケーターの役割をすることも増えてきました。物をつくる現場と依頼をする会社とそれを使う人たちの間はそれぞれの思いがあり、一方的につくっても受け入れられない場合が多いのです。いろんなジャンルの間にたって、〝通訳〟をしているという感覚が一番近いでしょうか。

自社の素材や技術をつかって、何をつくればいいのかという相談から、企画やコンセプトを考え、商品のデザインを起こし、販売ルートにのせながら、毎年海外の商品展示会で発表するという事を繰り返しています。企業と工場、バイアー、消費者の間のプレゼンテーターという役割です。

生まれ育った自然の多い環境と下駄や着物をつくっている家業が近くにあったせいもあり、ここ六年ほどは地方の伝統技術や素材の開発に力をそそいでいます。高知県の馬路村といっしょに開発した木のシリーズｍｏｎａｃｃａもその一端です。

トレイにつかわれていた杉の間伐材を東京の自宅近くの雑貨屋さんで見つけ、つくっている工場をたどっていった先に馬路村があったのがきっかけでした。ご存知のように馬路村はゆずの加工品の生産で全国的にも有名なところです。もともとは山の杉の生産で成り立った村で、いまでも山の九十％以上が杉の森に囲まれています。昔はこの杉をそだて建材として潤っていた時期もありましたが、安い外材の流通でその競争力がなくなり、ビジネスとして成り立たなくなってきたのです。そこでうまれたのが間伐材を山で加工品にかえて流通させていく方法です。

monacca

わたしが町で見つけたトレイは刺身やパン用として最初に開発された製品でした。通常自然素材を成形することは困難で、割れやしわが入りやすくなかなか製品にはなりません。三次元にきれいに曲面加工されている杉の木はそれだけで非常に興味深い素材だったのです。

携帯電話等にもあるボディのデザインを業界では筐体（きょうたい）と呼びます。もし、このトレイが筐体となって流通したらどれだけ面白いだろうと考えたのです。そして多くの木の製品が椅子やテーブルなどの家具や建材として消費されますが、もっと身近に木を感じられる製品があったらどんなにすてきだろうと。使い勝手のいい、工業製品として量産性、コスト性にすぐれたプラスチックができるまでは、古くから日本では弁当箱や下駄に多くの木をつかって生活してきました。ふたたび、もとに戻る事はできないけれど、現在のライフスタイルにあった別の製品であれば十分可能性は広がります。

工場を訪問中にバッグや電卓アイデアが浮かび、そのまま数カ月、数点の製品を提案しているうちにｍｏｎａｃｃａというブランドの輪郭が固まってきました。すぐに東京のデザイン展で発表。木の生活製品がそれほどなかった二〇〇四年当時、デザインの世界では相当話題になりました。紹介したことのない海外の雑誌からも注目が集まるようになり、ミラノでおこなわれているデザインの展示会ミラノサローネに出展し海外からも注文がくるようになります。ニューヨーク近代美術館（ＭｏＭＡ）での販売にもその後採用されました。

スーツケース型のバッグでありながら素材が木である事。一つ一つ異なる木目と杉の香りもありながら、耐久性もある製品として完成されている点が評価されたのでしょう。またバッグは他の地方の職人さん達とも組んで、木を直接縫い合わせするという難技にも取り組んでいます。製造過程で高知県のみならず、多くの職人の知恵と技がこの小さなバッグにつまっているのです。

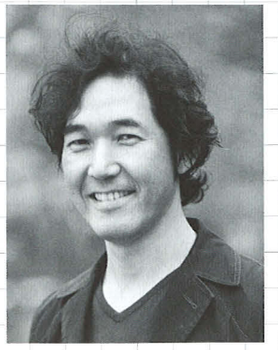
カラフルなボウル

非常にシンプルで機能的にも簡素なカタチは、木の成形と縫製をする技術と自然を大切したいという村のメッセージにつながって、世界中の人たちから支持される製品になりました。発想から販売までだれからか依頼をうけて生み出された製品ではなく、提案をかさねながら、村と一緒に素材と技術を完成させた結果だと思います。

今、もっとも大切にしているテーマが素材からデザインを考えるという事です。優れた素材や技術があれば、地方からでも面白い発信ができることをｍｏｎａｃｃａのデザインが証明してくれました。高知県はなかでも、杉にかぎらずヒノキや竹、土佐漆喰や和紙にいたる多くの素材や技術の宝物がいっぱい存在しています。山や川、海の自然の観光だけでなく、物をつくるクリエイターにとっても魅力的な土地だと思います。デザインの業界でも商業、農業、工業の一体化はよく聞く話です。豊富にある酒や魚、農産物と伝統的な素材や技術を融合させてビジネスにかえるデザインの取り組みが必要なのでしょう。

静岡の富士市にある紙の会社と開発したブランドでは、お米の紙袋をしばっている紙バンドをつかった生活用品を展開しています。リサイクルされた紙は色の開発や素材の見直し、他県の工場とコラボレーションを通してカラフルなボウルや照明に生まれ変わっています。

日本には地方地方で多くの技術が眠っており、従来ながらの製品にしか生かされていません。これらを組み合わせて物を考える企業や地域の連携したモノづくりも、これからのデザイナーの仕事かもしれません。



筆者

しまむら　たくみ
一九六三年　佐川町生まれ
ＰＤＡからカーデザインや観光バス等の輸送機関、小規模住宅やインテリア等の空間デザイン、家具やプロダクトデザイン等、幅広いジャンルでデザインを提供、展開している。二〇〇三年に立体成型の杉間伐材シリーズ「ｍｏｎａｃｃａ」を発表。二〇〇五年のＭｏＭＡでの販売に始まり、各国のデザイン展示会にも積極的に参加することで、グローバルマーケットでの販売に成功を納めている。グッドデザイン受賞多数。

今日も私は犬猫を処分しています

野村　笹乃

高知県が全国で八年連続ワースト一位。これは高知県で処分された犬猫の数÷人口（一万人）を全国で見比べた時の結果です。何故、こんな結果になるのでしょう？犬の処分頭数だけだと全国的に見て多くはありません。しかし、猫の処分頭数は上位入りしています。平成二十二年度・犬八百八十二頭・猫四千四百九頭で犬なら一日二頭、猫なら十二頭、犬猫合わせて三百六十五日の内たった一日で十四もの命が消えているのです。この現実を知ったあなたはどう思われましたか？

私がこの仕事に携わるキッカケとなったのは学生時代、動物好きな私に幼馴染がプレゼントしてくれた一冊の本でした。それが「どうぶつたちへのレクイエム」です。これは処分施設に収容され、命のカウントダウンが始まった子達の写真と、それを見た子ども達の感想、処分までの道のりがつづられていました。何となく知っていた保健所のイメージでしたが、写真があるだけにリアルで、こんな事が高知県でも行われているのかと半信半疑でした。就職していざ現実を目の当たりにすると、想像を遥かに超えた過酷で悲惨で理不尽な現実。飼い主が「噛むから」と言う理由で連れてこられた子は、私に触らせてくれました。ボタン一つでたくさんの命が消えて、ボタンを押した自分が〝殺した〟と感じました。自分は助けたい、でも全部は救えない。どうすればいい？いや、処分は仕方ない…飼い主が悪いんだから！でも、自分も飼い主と同じ人間…同じ人間のもたらした結果がこれ（処分）だ。どうすればいい？出来る事からやっていくしかない。消えていく命を無駄にしないように…。と葛藤の日々の始まりです。

飼い主の持ち込む理由は様々です。犬なら噛む・言う事を聞かない・引越しするから・猟犬に使えないなど。猫なら近所迷惑（糞尿害）が圧倒的に多く、犬猫共通理由は経済的に厳しくなった・計画外の繁殖（子犬・子猫）です。どうですか？納得いく理由でしょうか？犬猫が悪いと持ち込む飼い主の身勝手さに腹をたててもグッとこらえ、「飼い主さん次第で解決できる事ですよ」と考え直すよう訴えても、思い留まる方はほんの僅かです。いったい何のために犬猫を飼った（買った）のか…？犬猫をペットではなく家族と考える自分には理解できない事です。

処分の内訳で、犬は飼い主の直接持ち込みと保護される割合は半分半分です。しかし、猫は八～九割が飼い主不明の生まれて間もない子猫です。全国的に見て猫の処分頭数が多い原因はココにあると思います。いわゆる野良猫の子ですが、その背景には「家に来る野良に餌をやっていたら子猫を生んだ」と言う現実が深く関わっています。いわゆる〝餌をあげるだけの人〟が多く、そのほとんどの方が次に生まれてくる命の事や排泄物の事まで考えずに、負の連鎖を招いている自覚がないのです。僅かですが、餌をやりつつ不妊・去勢手術をし、子猫がいれば里親を探したりと一生懸命な方もいます。

先ほど私の意見として「犬猫をペットではなく家族と考える」と述べましたが、これを理解できる方は少ないと思います。でも、自分の考えが全て正しいとは思っていないですし、考えを押し付けるつもりもありません。家族と考える自分にはこの現状があまりにも悲しい事なので〝早くこの現実を無くしたい〟と思い、自分に出来る事を考えた結果、実際に処分の行われている施設で働き続け、窓口にくる方と直接話をし説得したり、収容されている子達の中から少しでも多く救えるようお世話をしたり、この現状を知らない多くの方に伝えたりしています。もちろん内部でも改善しなくてはいけない点も多いので、提案したり議論したりもします。私以外の職員もチラシを作ったり、人に馴れてもらうため連れ帰ったりとそれぞれが出来る事をしています。しかし、外部からは犬取り・犬殺し・殺して食っている（給料）など罵声を浴びる事もあります。仕方の無い事とは思いますが傷つきます。それでもこの仕事を辞められないのは今も消えようとしている命を見捨てられないからです。職員みんな同じ気持ちです。

冒頭でもお聞きしましたが、皆の税金で処分される命＝この現実を知ったあなたはどう思われましたか？何か感じた方は出来る事からでいいので行動に移してください。人にこの現実を伝えるだけでもかまいませんし、周りでペットを飼われている方に教えるだけでもかまいません。何も感じなかった人は何もしないままでいいと思います。でも、いつかペットを迎え入れる事があれば思い出して下さい。終生飼養できるか？老後の世話まで考えて下さい。今、ペットを飼われている方は周りの方に迷惑をかけていませんか？案外動物嫌いな人をつくっているのは、動物好きな方の勝手な行動が招いている事が多いのです。気をつけて下さい。ほとんどのケースは動物が悪いのではなく、人間側に非がある事が多いので。あと、無理に助けようとするのも辞めて下さい。許容範囲を超えた行動はかえって自分と動物を苦しめる結果になりかねません。

今すぐに処分施設を無くす事は出来ませんが、処分する必要の無い現実を目指しています。その為には命に携わる一人一人が、どこまで責任を持てるかよく考え、既に携わっている人は今一度考え直し、命と向き合って頂ければと思います。

私が日々目にする現実や伝えたい事はココには書ききれません。興味のある方は「高知県小動物管理センター」のホームページをご覧になってみて下さい。

これから雷や祭りの季節です。音に驚いて逃げ出す迷子の件数がグッと増えます。迷子になって困る前に迷子札など身元の分かる物の装着をお願いします。宜しくお願いします。

今は亡き愛犬：虎太朗と私

《参考図書》
『どうぶつたちへのレクイエム』
著者：児玉小枝
発行所：株式会社日本出版

慰霊碑

のむら　ささの
一九八六年　高知市生まれ
高知高校・短大卒業後、平成十九年に小動物管理センターへ就職（田邊工務店・環境事業部）。
南国市里改田在住。一児と一頭の母。

はらたいらさんの思い出・七回忌によせて

永吉　功

はらたいら氏

○きっかけ・出会い

昭和五十年頃のお話です。ある日、一本の電話が鳴ります。高校野球部の先輩から「漫画家のはらたいらを知っちゅうか。草野球のチームを作ってやりゆうき、お前も入ってやれ」「はい、分かりました」なぜか面接は新宿のスナック。野球の上手下手は関係ないようで、酒を飲んで人間を観察する、はらさん流の鑑定法なのです。そこは田舎から上京間もない無垢な私。すぐに「好きなばあ飲んで、今日は家に泊まったらええわや」と一発合格。

その日から、喫茶店や飲み屋さんにもツケをお願いするという典型的な貧乏学生の生活が一変。その日の食事の心配もなく、無担保債務保証までついた華やかな生活に変わるのです。

文京区小石川桜並木通りに面する高級賃貸マンションの八階（自宅）、六階（仕事部屋兼居候部屋）が、はらさんの居住場所です。金は残すな、家は持つなというのがはらさんの信条で、一生自宅を持たずに通した、我々小市民には理解不可能なやっぱり宇宙人なのです。

○家族と日常

家族は、恐ろしくさばけた奥さん、これぞはらさんのお母さんと思わせる酒豪のお婆ちゃん、勝気で可愛い二人の娘、完全無抵抗のアシスタント、そして追手前高校野球部ＯＢで固められた居候三～四人と、全員土佐人で毎晩のようにはらさんを囲み、土佐弁でワイワイガヤガヤ飲みながら夜を更かす毎日でした。

はらさんと奥さんの出会いは、山田高校時代、勤評闘争のリーダー役だった奥さんが、高知新聞に漫画を投稿していたはらさんにプラカードを依頼した事がきっかけだそうです。その後、はらさんを追って上京。まだ売れない頃のはらさんを〝絶対に漫画家として成功させる〟と支えた奥さん。輝く男の陰には必ず、今では考えられない内助の功があるのです。まだまだ夢を追いかける明日がある羨ましい時代だったんですね。

はらさんは仕事と酒以外、見事な程に関心が無く、二千円で血が売れたとホクホク顔で新宿に出掛けるような人で、見兼ねた奥さんが、十二月十四日、はらさんのハンコを持ってサッサと入籍を済ませました。ですから、赤穂浪士討入りの日がお二人の結婚記念日なのです。新婚生活は三畳一間のアパートで、押入れまでギュウギュウ、毎晩のように賑やかな宴会だった、と超売れっ子になった後も二人で懐かしく思い出されていました。

私達居候の仕事は、電話番、留守番、子守、はらさんの晩酌のお供と野球です。何といっても最難関は娘二人の子守。延々と終わらぬお馬さんごっこにトランプ。途中で「オシッコ」。経験の無い十八歳の私のうろたえる姿を想像出来るでしょうか。お婆ちゃん早く来て、奥さん早く帰って来て！

野球の試合後には必ず、はらさん宅で二十人くらいが集まり反省会をするのですが、当時失恋した私の為に、四歳の娘が即興でピアノを弾きながら慰めてくれたりするという可愛い子供達でもあるのでした。三十数年経た今でも、永吉おにいちゃんと呼ばれていて、気恥しく思いながらも懐かしく思い出されます。

はらさん家族

○ザ・パーフェクト

はらさんオーナーの草野球チーム名です。ユニフォームは当時としては、ド派手なブルー地に黄色のイニシャル。アンダーシャツも真っ黄色と余りに目立つ気恥しくなるものでした。メンバーも、編集、新聞、防衛庁、漫画家、そば屋、そして我等居候を含めた追手前高校ＯＢ。応援団はスナックのママやオカマの人達等、多士済々です。戦績はかなり良く、はらさん冠のニッサングリーンカップ杯では、東京都大会二年連続優勝。ここは大いに自慢ですが、私が二年連続最優秀選手に選ばれました。本当は毎試合十五三振くらい取る凄い大エースがいたお陰なのですが。当時はやりの芸能人チームにも連戦連勝で、はらさんもご満悦のようでした。

下段中央がはらさん、上段右端が筆者

そういえば、後楽園球場でホームランを打ったお祝いにと、近所の高級寿司店にも連れて行ってくれました。「何でも食えよ」何故か同席していた先輩が「左から右に全部」。イエイエ違うでしょ、今日の主役は私。負けずに私は「右から左に全部」食うわ、食うわ。締めて会計は十二万八千円也。はらさん御馳走様。またお願いします。

年末には、はらさんのポケットマネーで合宿と称して箱根で五十名くらいの大宴会。沖縄合宿と称してスキーと、貧乏学生としては有り得べからざる夢の世界でした。

○クイズダービー

居候生活も三年ほど過ぎた頃、はらさんはクイズダービーの解答者としてＴＶ出演するようになり、その知名度も全国区となりました。日々の暮らしも変化し、家で飲む事が少なくなり、朝九時から夕方五時まで仕事、六時には新宿という風になりました。我々居候も何人かで新宿に出掛ける事も度々で、はらさんの雷を浴びる事もありました。「今日はおんしゃらあと飲もうと早う帰って来たに、誰も居らんとはどういう事な！」居候全員お払い箱。しかしそこは淋しがり屋のはらさん。三～四日もすると奥さんから「たいらさんが淋しがりゆうき、早うきいや」と優しい天からの声が届くのです。

ある日突然、トイレがジャングルになっていたり、酔って寝れば顔中インクだらけ、旅館で入浴すれば浴衣が無くなり、桶一つ抱えて裸で部屋まで走ったりと、手抜きせず遊びやいたずらも一生懸命な本当にガキ大将で居続ける人でした。

私も何故か、クイズダービー百回放送記念の時に奥さんと一緒に出させていただき、無事十万円ゲット。一人占め。奥さんに借金を返し、飲み屋のツケも返済。有り難い思い出です。

奥さんと筆者

○どうしよりゃ、おんしゃあ

居候も卒業を迎える頃となり、就職時には全員のスーツを新調してくれるという、相変わらずの面倒見の良さに心を残しつつ、社会人に巣立ってゆきます。田舎に帰る人、東京に残る人。

土木事務所のオーナー、銀行員、編集長、公務員、そして私は日本酒の飲み屋のおやじと、そろそろ人生の中盤から終盤に近づいた今も奥さんを囲んで、はらさんの昔語りをしています。「どうしよりゃ、おんしゃあ。中途半端にすな。絞り切って何にも出なくなった雑巾を更に絞って、零れた二～三滴を掬うて、仕事はするもんぞ。しっかりせんか」仕事、恋愛、結婚と楽しみや悩みもたくさん抱えながら皆各々、はらさんの言葉に背中を押され、どうやらこうやら今まで頑張ってこられたと思います。

今でも辛い事があると、やっぱり聞こえるような気がします。「どうしよりゃ、おんしゃあ」と……。

p・s・十一月三日には高知で七回忌が行われ、翌四日に絵金誕生二百年と重ねて赤岡町弁天座にて狂言が催される予定です（入場料四千五百円）。

ながよし　いさお

一九五六年　南国市生まれ

追手前高校、神奈川大学卒業後、東京にて就職。帰高後、高知パレスホテルにて勤務。一九八八年より土佐酒処ぼくさん開店。現在に至る。

言葉の現場から 34

「舞姫」豊太郎の反抗期のなぞ

広井 護

森鷗外の「舞姫」は、高校教材の中でも名作中の名作と言われている。だが、生徒泣かせ、教師泣かせの教材でもある。

擬古文という文体のわかりにくさもあるが、主題とのかかわりで言及される「近代的自我の覚醒」という難解な用語（ターム）。これが鬼門なのである。

主人公である若きエリート官僚、太田豊太郎はドイツ留学中に、「近代的自我」に「覚醒」する。そのため上司からにらまれ、日本人留学生仲間からは孤立する。この孤独感ゆえに、豊太郎は踊り子エリスとの悲劇的な恋へのめりこんでゆく。豊太郎がエリスとの恋に落ちる前提が「近代的自我の覚醒」なのである。

以下がその核心部だ。

A「今二十五歳になりて、既（すで）に久しくこの自由なる大学の風に当たりたればにや、心の中なにとなく穏やかならず、奥深く潜（ひそ）みたりしまことの我は、やうやう表に現れて、昨日（きのう）までの我ならぬ我を攻（せ）むるに似たり。」（今二十五歳になって、長い間自由な大学の風に吹かれていたからだろうか、心の中がなんとなくおだやかでない。奥深く隠れていた本当の自分が、しだいに表に現れて、昨日までの自分ではない自分に攻めかかってくるように感じられる。）

「近代」の反対は「前近代」である。（明治期以前の）前近代社会では、人々は、「自分」というものを、家の一部、藩の一部、村の一部、つまり共同体の一部としてしか意識していなかった。だから、家のため、藩のため、村のため、（維新後は）国家のために生きることが、人々にとっての至上価値だった。

ところがドイツの大学の自由な雰囲気に触れた豊太郎は、「家の一部でもなく、国家の一部でもない自分」を意識し始める。そして家や国家に対して、批判的で反抗的な目を向けつつ、新しい生き方を模索し始める。しかしそれは、前近代的な日本社会の中では、異分子となることであり、危険な位置に身をおくことでもあった。

「舞姫」で描かれた、豊太郎の「自我の目覚め」は、明治期の先進的知識人の「自我意識の誕生」を巧みに作品化したものと言えるだろう。

ところがこの説明は、生徒たちの胸には、すっきりと落ちない。「奥深く潜みたりしまことの我」や「昨日までの我ならぬ我」といったテキスト中の言葉も、わかるようでわからないらしい。なにより「近代的自我の覚醒」が、現代の高校生の人生と関係があるのかないのか、ピンとこないのである。

初めて「舞姫」の授業をしたときは、教壇の上で途方に暮れた。「近代的…」の説明をはじめると、生徒たちの目がうつろになり、一人、二人と授業から下りてゆく。爆睡する生徒も出てくる。だが、どうすることもできなかった。

ところが、何度目かの授業をしたとき、生徒たちの感想の中に、ハッとするような見解を見つけた。

●豊太郎の「自我の目覚め」というのは、中学二年ごろの自分とよく似ていると思った。あのころは反抗期だったので、親や先生にいろいろと反抗して困らせた。豊太郎は、二十五歳にもなって、まだ反抗期しているのかと思って、あきれた。

目の覚める思いだった。豊太郎の「穏やかならぬ」心は、たしかに反抗期の心理として説明できるのである。

教育心理学に「自分くずし」（ターム）という用語がある。

子どもは、親や教師からほめてもらうために、幼児期から必死になって「良い子」を演じる。そうやって「良い子」の自分をつくってゆくのである。ところがこのつくられた「良い子」のままでは、自立した個人として社会の中を生きてゆけない。

そこで、ある時期から子どもは「自分くずし」を始める。つくられた「良い子」の自分を解体して、新しく「自立した自分」をつくりだそうとあがき始める。これが思春期＝反抗期だ。

この時期の中学生は、教師の名前を呼び捨てにし、母親に向かって「くそばばあ！」と罵声を浴びせたりする。しかし内心は、きわめてナイーブで傷つきやすく、孤立感にとらわれやすい。精神的に大きく揺れるこの時期に子どもたちは自立のきっかけをつかむ。

たとえば以下に描かれている豊太郎の内面は、すこぶる中学生的だ。

B「余はひそかに思ふやう、我が母は余を生きたる辞書となさんとし、我が官長は余を生きたる法律となさんとやしけん。辞書たらんはなほ堪（たえ）ふべけれど、法律たらんは忍ぶべからず。」（私の母は私を「生き字引」にしようとし私の上司は私を「歩く法律」にしようとしていたのではないか。「生き字引」となるのはまだ耐えられるが、「歩く法律」になることには我慢がならない。）

同趣旨の表現が、「舞姫」中にはくり返しあらわれる。きわめつきは、**「…人のたどらせたる道を、ただ一筋にたどりしのみ。（私は、人の敷いたレールの上をただ走らされてきただけだ。）」**という豊太郎のストレートな告白である。

これらは、引用「A」中の「我ならぬ我」を呪っている言葉だ。典型的な「自分くずし」の心理である。

「我ならぬ我」は、親や上司によってつくられてきた「良い子の自分」と考えられる。そして「奥深く隠れたりしまことの我」は、「主体的で自律的な本当の自分」と言えるだろう。そう考えると、引用「A」はすっきりと理解できる。

A「奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表に現れて、昨日までの我ならぬ我を攻むるに似たり。」（これまで意識していなかった主体的な自分が目を覚まし、親や上司によってつくられてきた「良い子」の自分を攻めたてているように感じられる。）

はじめからこう説明すればよかったのである。この説明は、高校生には非常にわかりやすいようだ。自分たちがくぐりぬけてきた思春期の心理とリアルに重なるからだろう。

私は、授業の中で「思春期論」を熱く語るようになった。

ところがこう説明しても、生徒たちの顔には依然として釈然としないものが残るのである。…それは、豊太郎が明治時代の高級官僚であり、二十五歳の社会人であるということからきている。当時としては立派な大人である豊太郎が、なぜ中学生の反抗期のような「幼い」心理を生きているのかということだ。しかもそれが「近代的自我の覚醒」という大げさな言葉で呼ばれる。そのことの意味がわからないのである。

この疑問に答えるには、発想の転換が必要だ。豊太郎が中学生的なのではなくて、中学生が「豊太郎的」なのだと考えてみるのである。現代の中学生たちは、（豊太郎が象徴する）明治期の先覚者たちの経験した「自我の覚醒」を、百年遅れで追体験しているのではないだろうか。

以下、私の仮説である。

前近代社会には、人間は二種類しかいなかった。「大人」と「子ども」である。大人でもない、子どもでもないという「青年期」は存在しなかった。当然「反抗期」もなかった。

たとえば、江戸時代の武士の家で、十代の少年が母親に反抗して「くそばばあ！」と叫ぶといったことは、なかったであろう。

子ども時代が終わると、人々はそのまま大人になったのである。個の意識を育てる青年期がないために、「大人」たちは、「自分」の存在を、「家の一部」「藩の一部」「村の一部」としてしか意識できなかった。

そういう封建社会の中から、「家の一部」でもなく、「国家の一部」でもない「自立した自己」の意識を持った個人が出現することは、一種の革命だったに違いない。それは、一般大衆の経験できることではなかった。選ばれた個人にだけ「青年期」は、特権的に与えられたのだ。

とはいえ、西洋に留学し、近代の空気を呼吸している豊太郎のような選ばれた人間にとってさえ、「自分くずし」は冒険だった。江戸時代に幼年期をおくった明治初期の「大人」である豊太郎は、思春期も青年期も経験していない。豊太郎が、現代の中学生のような幼い「反抗」によって、「自我の目覚め」を表明し始めたのは、無理からぬことだ。それは当時の日本社会においては、十分に危険なふるまいだったのである。

日本の「青春」はこのようにして始まったのだ。それは「近代的自我の覚醒」という「大げさな」言葉で呼ぶにふさわしい精神的偉業だった。その偉業を現代の中学生たちは、それと知らずに十代で継承しているのである。――ここまで語りこんで、はじめて生徒たちの顔に納得の表情が浮かんだ。

生徒の表明する違和感を受けとめて、その由来を読み解いてゆくこと。作品世界を読み開く秘訣はここにあると思うのである。

ひろい まもる
一九五四年 高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

「聞き書き」の思い出は僕の宝物

佐竹　大和

聞き書き甲子園の「聞き書き」とは、「森・海・川に関する分野において優れた技や知見をもってその業を究め、生活者の模範となっている達人」である、『森の名手・名人』『海・川の名人』のもとに高校生が行き、名人の半生・技能や名人の地元の文化・伝統を取材して、文章にまとめることです。

僕は先生から「先輩も過去に参加しているし、大和の将来に役立つはず」と誘われて、全国の高校生にも会える滅多にない機会だと思ったので、参加しようと思い、『森の名手・名人』を選んで申し込みました。

僕達参加者は二〇一一年八月に東京で三泊四日の研修会に参加して、そのあとそれぞれの名人のもとに二回取材に行き、その内容を文章化して、今年の三月に東京で行われた「聞き書きフォーラム」で、それぞれの体験を語り合いました。

研修会は僕にとっては初めての東京だったし、全国の高校生七十人が集まるという事で、とても緊張しました。でも、班の中の人たちとは、すぐに仲良くなりました。内容は少し難しかったですが、聞き書き甲子園の卒業生がスタッフとして、自分の体験談を話してくれたり、アドバイスをしてくれたりして、楽しく「聞き書き」を学ぶことが出来ました。この研修会で僕は、名人と名人の職業を自分が深く知り、さらに名人と名人の職業を知らない人にそれを理解してもらうには、名人に遠慮しないで何度もたくさんの質問をしなければいけない、という聞き書きをする上で重要な考え方を学ぶことが出来た、と思っています。研修会が終わったときは、七カ月後のフォーラムまでみんなと会えない寂しさと、これから始まる「聞き書き」への期待と不安で胸がいっぱいになりました。

それからから約一カ月後に、取材に行く名人のプロフィールが届き、名人に電話をして、取材の日程・場所を決めました。とても緊張したけど、電話をしてみると、名人の声と話し方が優しくて、なんだか安心しました。

僕が取材に行った名人は、とても明るくて気さくな人でした。取材では、名人が生まれてから現在にいたるまでの事と、現在の仕事の事を、約二時間にわたって聞きました。取材のあとには、小学校の改築に使うために大径木を伐採した場所に、連れて行ってくれました。二回目の取材の時には、実際に仕事を見せて貰いました。そばに電線と電柱がある場所でそれに接触しないように、仲間と協力して木を伐採していました。その手際がとても鮮やかで、写真を撮りながら、見入ってしまいました。

そのあとに行った取材内容の文章化は、とても大変な作業でした。合計約四時間の取材を録音したものを聞いて、それを文字で打ち出して、規定の文字数内でまとめなければいけないという、気の遠くなるような作業を、締め切りまでにやらなければいけなかったからです。一応、計画を立ててやりましたが、とても大変な作業で、完成までには合計二十時間以上かかりました。でも、完成したら、大きな達成感を感じました。また、完成したものを実行委員会に送ったあとには、肩の荷が下りた感じがして、開放感を感じました。

今年の三月の「聞き書きフォーラム」では、二日の日程でふたたび七十人の仲間が集まって、お互いの体験を語り合ったりしました。ひとつとして同じ体験談がなく、みんなの「聞き書き」を知ることができて、とてもよかったです。この「聞き書きフォーラム」で僕の「聞き書き甲子園」は終わりました。七十人の仲間や、スタッフと会えることはもう無いと思います。でも、「聞き書き甲子園」での貴重な体験や経験は、これからの人生に絶対に役立つ、僕の一生の思い出で宝物です。

さたけ　やまと

一九九五年　土佐清水市生まれ
二〇一〇年土佐清水市立清水中学校卒業後、県立幡多農業高校グリーン環境科に入学し、現在三年生。昨年、第十回聞き書き甲子園に参加。

鎮守の森は今

県内の神社めぐり体験記（四）

竹内　荘市

十数年前、県東部の神社が数社同時に放火されるという事件が起きた。また、お賽銭泥棒が横行して話題となったこともあった。そして寺社の宝物が盗難に遭うという事件が全国的に問題となったこともあった。少子高齢化が進み神社の管理が困難で、この種の事件が起こり易いと言えるのかも知れない。

神社巡りで、ある神社に行くと、お賽銭箱の横に小さな木札が掛けてあった。「ここにお賽銭はありません」と書いてある。何だか私が疑われているようで思わず苦笑した。また、ある神社には、「物を盗って心を捨てるのですか」と書いてある。なるほど！　その通りだと言いたくなった。そしてまたある神社には、「ここには、ある仕掛けをしてあるので、物を盗れば必ず捕まえてやるから覚悟しておけ」とある。面白い文言だが笑い事ではない。神聖な場所にこのような疑いの札を置かねばならないのは何とも情けないことである。

そんな事情からであろうか、最近は神社に鍵を掛ける所が多い。従って自由に神社内を見ることが出来ない。ひどい場合は、フェンスを張り巡らせて人が近づけないようにした神社もある。それだけに氏子達の苦労のほどが窺える。神社近くで人に出合えれば、事情を話して見せてもらい、神社にまつわる話をお聞きし写真も撮らせてもらうのだが、それが出来るのは稀である。

人の住んでいる所には、必ず神様が祀られているといってよい。また人のいなくなった集落跡地に行っても神社を見つけることがある。集落消滅の原因が、ダムの湖底に沈むとか、大規模開発に伴うような場合には、神社も計画的に遷座される。ところが普通には、人家が一軒減り、また一軒というように少しずつ人が去り何時の間にか集落全体が消滅する。こういうケースでは神社だけが取り残されることになる。しばらくの間は年に何度かお参りもされるが、やがて放置され消滅する。

①ある山間の集落跡で、ようやく神社を見つけ行ってみた。鳥居が傾き何時倒れるかも知れない。神殿内は根太が落ちて入れない。それでもお参りに来る人があるらしく、入り口に注連（しめ）飾りがしてあった。

②山上のある神社を訪ねた。雑木の茂る山道を約一時間かけて辿り着いた。山頂の周囲に樹木がなければ、さぞ見晴らしが良いことであろう。そこには古い神社がぽつんと建っていた。四方から支え棒で倒れないように支えている。たまには氏子がお参りに来るとみえ、お酒の二合瓶が供えられ、注連縄の片方が外れて垂れていた。

これらに似た光景が、時々見かけられた。神社巡りの余所（よそ）者が言うべきことではないのかも知れないが、何か良い方法はないものかと考えさせられた。

神社の維持管理が出来なくなった場合の対策としてよくある事例としては、近くの神社に合祀する。或は神社の建物をコンパクトにして頑丈に建て替える。また大きな神社の境内に遷座して、由緒書きした石碑を建てておく等々がある。

神社のありようは、その根本には信仰心がある。かつて、お伊勢参りや熊野詣でが盛んだった時代には神社数が増え、科学の進歩や信仰心の希薄化の時代には減少し、また社会情勢の変化にも左右されるのかも知れない。

いずれにしても、人々が昔から引き継いできた生活文化の一端が、今大きく変化しているのではないかと危惧するのである。政教分離の憲法から、行政が宗教に関与することは出来ないにしても、明治初期に行政がまとめた神社明細帳のような、神社総覧的なものが出来れば良いのだがと常々思うのである。

たけうち　そういち

一九三八年　高岡郡四万十町生まれ
専修大学法学部卒業。高知営林局、（特）損害保険料率算出機構高知調査事務所、（社）日本損害保険協会高知相談センター等に勤務。

4月～6月の事業から

◆高知市所蔵絵画展

高知市文化プラザかるぽーと開館十周年記念事業として四月七日（土）～十五日（日）まで市民ギャラリー第一展示室で開催しました。

高知市・高知市教育委員会・高知市水道局などでは、多くの絵画を所蔵しています。その中から、高知出身あるいはゆかりの作家による作品四十四点を展示。来場された多くの方は、県展などを通じて市民に親しまれてきた作家の作品を前に、さまざまな思いが呼び起こされたようで、熱心に鑑賞していました。そして「このような展示を定期的に開催してほしい」というたくさんのお声をいただきました。

谷是氏によるギャラリートーク

十四日（土）には、土佐史談会副会長の谷是（たにただし）氏によるギャラリートーク「土佐の近現代洋画壇を彩る作家たち」が開催され、参加者は熱心に耳を傾けました。また、会期中関連企画として当事業団の発行書籍の原画や、本誌の表紙を飾った絵画や書を展示し、好評をいただきました。

◆第六十四回高知市文化祭開幕行事
『土佐七色紙伝説 ～あなたという希望を胸に…～』

毎年四月から六月は高知市文化祭として様々な催しが市内あちこちで開催されます。その皮切りとなる開幕行事は、今年は土佐和紙の誕生をテーマにした創作演劇で、開館十周年を迎えたかるぽーと大ホールで四月八日（日）に上演しました。

いの町成山に伝わる新之丞の伝説をもとに書き上げられた脚本を、高知市の劇団や舞踊家、いの町・高知市の市民参加の方々の熱演で観客を感動させました。なかでもいの町神谷小学校の子どもたちのいきいきとした演技が舞台を盛り上げ、アンケートでも多くの好評の声をいただきました。

高知市の芸術文化のシンボルとして船出したかるぽーとの、開館十周年記念にふさわしい舞台となりました。

◆ガラ・コンサート
〝ふるさとに贈る珠玉の歌声〟
～オペラ・アリアから日本の名曲まで～

高知市文化プラザかるぽーと開館十周年を記念して、高知出身の山﨑智世さん（メゾソプラノ）、所谷直生さん（テノール）、和下田大典さん（バリトン）、浜口典子さん（ピアノ）に、埼玉県出身の光岡暁恵さん（ソプラノ）をお迎えした華やかなガラ（祝賀）コンサートを四月十五日（日）大ホールで開催。四百四十人の方にご入場いただきました。

第一部は、お馴染みのオペラからの独唱や二重唱ののち、『椿姫』から「乾杯の歌」を歌手全員で合唱。日本酒の一升瓶や可杯（べくはい）を高らかに掲げて歌うという、地元ならではの演出に会場も沸きました。

第二部は高知に縁のある平井康三郎、弘田龍太郎らの曲を演奏し、最後は、やなせたかし作詞「手のひらを太陽に」を客席と合唱して幕を閉じました。

高知市文化振興事業団

◆演出家・俳優養成セミナー 2012
『演劇大学 in こうち』

今回で二回目となる「演劇大学 in こうち」。演劇界の第一線で活躍する日本演出者協会所属の演出家七人が来高し、演劇に関するワークショップを通じて、演出の技術や役者としての考え方を教えました。

流山児祥氏、和田喜夫氏などほとんどの講師が、声を出し、体を動かす実戦的な講座を開催しました。篠崎光正講師は、演出の技法や心得を講義し、高都幸男講師は二日半かけて、野田秀樹の『真夏の夜の夢』の一部分を三十分程度の芝居に仕上げました。高知出身の明神慈（やす）講師は体を緩める方法を伝授し、大杉良講師は小中学生に舞台での表現についてアドバイスするなど三日間で全十八の講座が開催され、申込者は百三十一人でした。交流会にも二十八人が参加し、熱い語らいの中で演劇大学は幕を閉じました。

◆第六回高知市民ミュージカル
『音の旅人』オーディション

五月十九日・二十日と、高知市民ミュージカルの出演者オーディションを行いました。

今回上演する作品は、二〇〇八年に上演し、好評を博した「音の旅人」の再演です。

高知の文化財産として今に繋がる「よさこい祭り」の基礎を創り上げた武政英策の生涯を通じて、現代に生きる我々が引き継ぐべき「自由に音楽を愛する心」を表現する本作品のオーディションには、小学三年生から六十三歳まで七十三名の方が集まり、ダンス・歌・台詞それぞれの課題を緊張した面持ちでこなしていました。

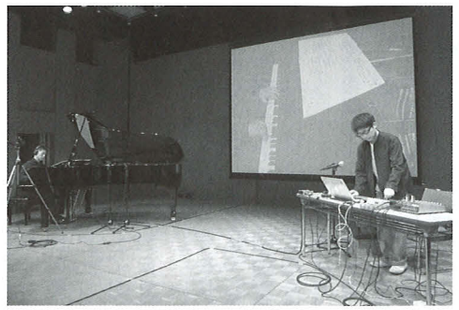
オーディションの後は、五月二十九日より劇団練習を開始。これから十月二十日・二十一日の本番まで、長いようで短い充実した稽古を積み、本番に望んでいきます。

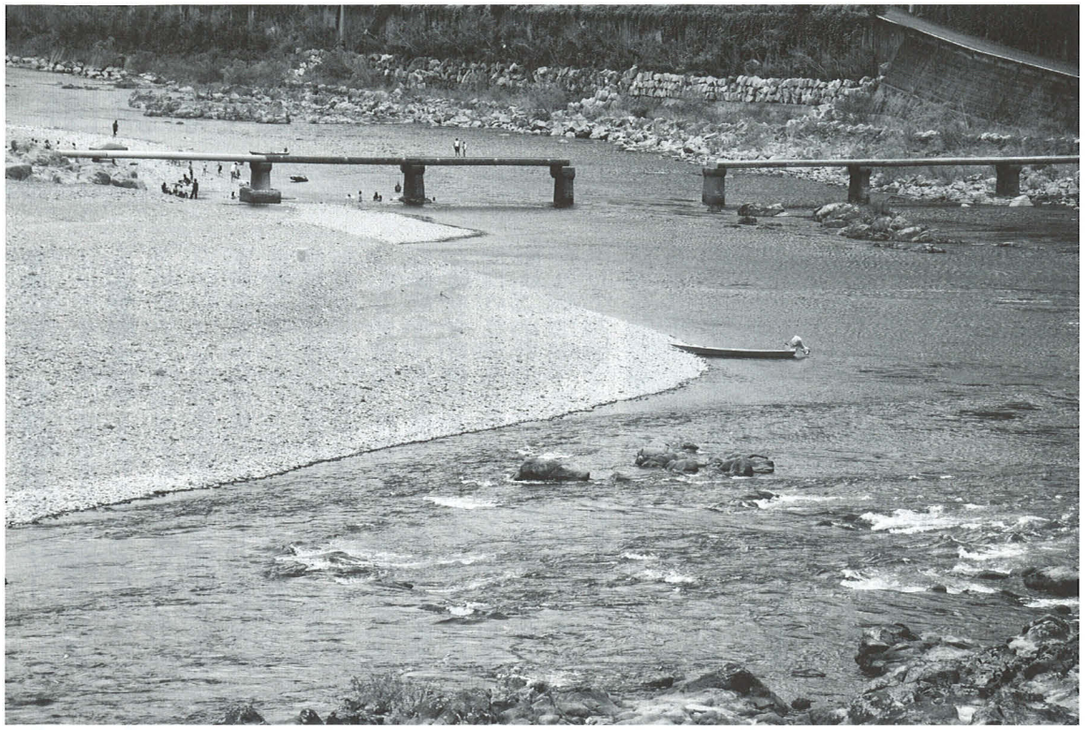
◆IMPACT from BACH
クラシック音楽とクラブミュージック

六月二日（土）、かるぽーと小ホールにて開催しました。

本プログラムは、本県出身で作曲家・ギタリスト・DJとして多方面で活躍するタケムラヤスシさん、ピアニストでエリザベト音楽大学講師でもある伊藤憲孝さんによる出演で「音楽の父」と称されるバッハが作曲したゴルトベルク変奏曲を基に、クラブミュージックをキーワードとした技法やテクノロジーを使用し、新たな楽曲を公開制作するという内容です。

集まった聴衆は、ピアノのアコースティックな響きと、最先端のコンピュータを駆使した音楽の両立に、大きな拍手を送っていました。





高知を撮る

第28回写真コンテスト入賞作品

再三の流失

（平成23年8月　四万十市長生）

戸田　武男

集中豪雨の威力、この橋は21年にも左方が流失。22年春の完成日に撮影できましたが、今年も流されたと耳にし、撮影に来ました。

連休の中の憲法記念日

風俗歳時記

今から百二十三年前の二月十一日「大日本帝国憲法」が発布され記念式典が催された。式典は午前十時半から宮中正殿の大広間で行われ、式には政府高官や華族、外交官などが出席した。

定刻がくると天皇は憲法前文「上論」を読み上げ、朕は先祖がこの国をつくり治めてきた事業をひきつぎ、この国を支配するためこの憲法を制定したと述べた。

ドイツから医学教育のため招かれ来日していたベルツは、前々日の日記にこう書いている。「東京全市は十一日の憲法発布を控えてその準備のため、言語を絶した騒ぎを演じている。いたるところ奉祝門、照明、行列の計画、だが滑稽なことには、誰も憲法の内容を御存知ないのだ」と。

街は祝賀一色につつまれていたが、憲法の内容は全く国民に知らされていなかった。

中江兆民は「賜与せらるるの憲法、果して玉かはた瓦か、いまだその実を見るに及ばずして、まずその名に酔う。わが国民の愚にして狂なる。何ぞかくのごとくなるや」と嘆いている。そして発布された憲法は、一読して苦笑するのみだったという。

それから五十八年後に、敗戦という大きな代償を払って現在の民主憲法ができた。明治憲法との大きな違いは、「主権在民」になり「戦争の放棄」や「基本的人権の尊重」などが強調されていることである。まさに民主国家日本の新しい出発を告げるもので、国民はこぞって歓迎した。この歓迎は感動をともない本物だった。

だがその高揚感も歳月を経るとともに薄れ、いまでは、国民こぞってその意義を考え祝おうという「憲法記念日」も、ゴールデンウイークの単なる休日の一日になってしまった。国民の祝日にもいろいろあるが、「憲法記念日」だけは、せめて年に一日、国家の基本について真剣に考える日として、風化させたくない祝日の一つである。

（蒜）

第62回 高知市夏季大学

高知市の夏の風物詩として広く親しまれている
高知市夏季大学。
各界の第一線で活躍する多彩な講師陣で、
夏の夜を有意義に過ごしてみませんか。

- ●期　間　7月25日㈬～8月7日㈫〔土・日曜日は休講の10日間〕
- ●時　間　18：30～20：00（開場18：00）
- ●会　場　高知市文化プラザかるぽーと大ホール
- ●受講料　一般 3,600円、割引（学生・高齢者等）2,600円
  ※どちらも10日間通しの料金
  ※ 7月3日㈫から販売
  当日券 900円
  ※各講演日当日、席に余裕がある場合のみ会場で販売

お問い合わせ　高知市文化振興事業団　TEL088-883-5071

風伯

後始末

どのくらいの人が読んでくれているかわからないが、前回の結末を一応書いておくと、老親は経管栄養を止めて二十日後に亡くなった。本人は苦しみもせず、孫やひ孫にも看取られ眠るように息を引き取った。葬儀は僧侶を呼ばず身内だけで済ましたが、それでよかったと思う。後は先祖代々の墓地にとりあえず納骨することになるわけだが、そのお墓そのものの存在もいま大きな課題を残している。自分の子供たちはすでに生まれた土地を離れているし、その子供となると、日本に住んでいないかも知れない。そんな状況でお墓などという動かしがたい代物が存在することが実に悩ましいのである。お寺の永代供養といってもせいぜい三十年で、それを過ぎると合祀だろう。それで納得できるならそれでもいいが、金次第でどうにでもなるというのも抵抗がある。これまでのような墓地であれば、そのうち荒れ果てるに決まっている。荒れるに任せておくのがいちばん楽なのだが、それでは無責任だろう。守り続けられる当てのないコンクリートや石のかたまりは、自分の代で何とかしておきたい。

親の最期を自分が決めたように、墓地や墓がどうであったかの記録だけでも残して、いずれ「処分」しなければならないと思っている。そうした義務を自分が背負わなければ、子供たちに大きな負担をかけることになる。

自分は、どこかの「花の下」というわけにもいかないから、海や山などの障りのないところに散骨してもらうつもりだが、墓地や墓の処分となると、いつどのように実行に移すか、その踏ん切りが悩ましい。

（霖）

ピーター・バラカンの選ぶ ビートルズの20曲

テレビ・ラジオ等さまざまなメディアで
活躍するピーター・バラカンさん。
そんなピーターさんが10代の頃に
リアルタイムで出会ったビートルズをテーマに、
社会現象となった当時のミュージックシーンや
ユースカルチャーの解説も交えながら、
DJスタイルでビートルズの音楽を語ります。

2012年7月7日（土）18:30開演
高知市文化プラザかるぽーと小ホール
全席自由 前売り 2,000円　当日 2,500円

【お問い合わせ】
高知市文化振興事業団 TEL088-883-5071

今号の表紙

「お盆の日」

元久　芽以

日本の昔からの行事であるお盆を描き、周りに水紋のような模様を配置し涼しさを表現しました。

（もとひさ　めい／国際デザイン・ビューティカレッジ2年生）

※「南極観測隊同行日誌（下）」は、筆者の都合により次号以降に延期いたします。ご了承ください。

文化高知 No.168 [隔月発行]
2012年(平成24年) 7月1日発行

公益財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071/郵便振替01680-5-14869

高知市文化プラザかるぽーと 開館10周年記念事業

松田弦 ギターリサイタル

スペインのフォリアによる6つの変奏曲／ジュリアーニ(P.Giuliani)
ソナチネ／トローバ(F.M.Torroba)
悪魔の奇想曲／テデスコ(M.C=Tedesco)
ファンタジア・カリオカ／アサド(S.Assad)
ほか

2012 8/18 SATURDAY

高知市文化プラザかるぽーと
[大ホール] 18:00 開場　18:30 開演

チケット
前売り／一般:2,000円　大学生以下:1,000円
当　日／一般:2,500円　大学生以下:1,500円

松田弦氏 プロフィール

高知県出身。
高知県立岡豊高等学校音楽コースギター専攻科卒。
2009年第52回東京国際ギターコンクール第1位、
第9回アジア国際ギターコンクール(タイ、バンコク)第1位をはじめ、
2000年～2009年までに国内外7つのコンクールで第1位受賞。
2011年秋より、フランス　ストラスブール音楽院に留学中。

OFFICIAL HP　http://www.matsuda-gen.com

お問い合わせ：高知市文化振興事業団 TEL:088-883-5071
〒780-8529 高知市九反田2-1　http://www.bunkaplaza.or.jp
主催：公益財団法人高知市文化振興事業団
後援：高知新聞社・RKC高知放送・NHK高知放送局・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ
KCB高知ケーブルテレビ・エフエム高知

チケット取扱所：高知市文化プラザかるぽーとミュージアムショップ・高知県立美術館ミュージアムショップ
高知県立県民文化ホール・高新プレイガイド・高知大丸プレイガイド・楽器堂 OPUS

●はりまや橋より徒歩5分　●高知駅より車で5分

http://www.kfca.jp　e-mail kikaku@kfca.jp